

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：40109

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25871016

研究課題名（和文）ホームレス者に対する個別的で継続的な支援に関する研究

研究課題名（英文）the study of a continuous and individual support system for homeless people

研究代表者

山内 太郎 (YAMAUCHI, Taro)

札幌国際大学短期大学部・幼児教育保育学科・講師

研究者番号：90369223

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、脱路上後の生活困難を構造的に把握し、必要となる支援を検討することである。そのため、元路上生活者及び支援団体に対して以下の調査を実施した。参与観察によって元路上生活者に対する支援の状況と継続した支援の困難性を検討した。元路上生活者に対する生活史調査を実施し、彼らの育ちと現状の生活困難との関連について検討した。支援団体の支援の現状について調査を行い、継続的な支援が必要な事例と制度上の制約による支援の困難性について検討した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to grasp the problems with former roof-less people's livelihood, and to consider the necessary support system. So we conducted the survey to the people concerned and support organizations. The contents are follows.  
We deliberated on the difficulties of continuous supporting, through participating in the actual situation of support for former roof-less people. We carried out the interview to former roof-less people, and we considered the relationship between their life story and difficulties they are facing. We examined the cases which need to continuous supports, and investigated into the difficulties of supporting due to institutional restriction, through the research about current situation of the support organizations.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ホームレス 貧困 伴走型支援 生活困窮者

## 1. 研究開始当初の背景

厚生労働省が実施した調査によれば、ホームレス者の人数は2003年の25,296名をピークに減少しており、本研究が開始された2013年の時点で8,265名と3分の1程度になっていた。その後も減少傾向は続いているため、ホームレス問題は一見すると解決に向かっているようにも見える。しかし、この調査結果は別の問題と表裏である。

すなわちそれは第一に、ホームレス者の定義にかかわる問題である。先の調査におけるホームレス者とは、いわゆる路上生活者を指しているが、そこには例えば友人/知人宅に居候状態で過ごしている者やネットカフェ、ファーストフード店などで寝泊まりする者の存在は含まれていない。「屋根のある生活」であっても生活基盤が不安定であれば「広義のホームレス」と捉えるべきだという指摘もあり、ホームレス者とは誰を指しているのかということ自体が重要な論点となっている。

第二に、脱路上後の生活のあり様にかかわる問題である。路上生活から居宅によって地域に根を下ろした生活に移行することは容易ではなく、生活が破たんして再び路上生活へと戻ってしまう者や地域で孤立した生活を送っている者(アルコール依存症等につながってしまう場合も多い)など、何らかの支援が必要となる場合が多い。ホームレス支援とは「畳の上」に上げるだけでなく、その後の生活マネジメントも範疇に含まれるが、こうした理解は2013年の時点では支援団体関係者の一部にとどまっていた。

第三に、減少傾向にあるホームレス者の内容、つまり路上に残っているのは誰なのかという問題である。従来の研究では、当事者に建設労働関係の従事者が一定数いることは指摘されていたが、他方で、新たに路上に流入する人の中には、身元引受人のいない刑余者や身寄りのない障がい者がかなりの割合で存在することが分かってきた。また、平均年齢の上昇や路上歴の長期化も傾向として指摘されている。ここからは脱路上における困難性をともなった層が路上に取り残されている可能性が示唆されよう。

これらの問題から見てくるのは、住居や生活費の確保などの物質的な充足だけでは解決しないホームレス問題の根深さであり、当事者の潜在能力を引き出すような個別で継続的な支援の必要性とその担い手の不在であろう。もちろんこうした支援を作り出す機運は高まっており、2013年の時点でも「パーソナル・サポートサービス(PSS)」や「伴走型支援」など具体的な取り組みが始まりつつあった。こうした動向の中で、個別で継続的な支援のあり様を実証的に示すことが求められており、本研究もそれを意識して構想された。

## 2. 研究の目的

本研究では、路上生活者だけでなく路上生

活を脱した後もなお居住環境が不安定な者をもホームレス者と定義した。そのうえで彼らが脱路上後に抱える生活上の課題を把握すること、そして生活の再建を果たすうえで必要となる支援を検討することが大きな目的となる。より具体的には以下の課題を設定した。

### (1) 「関係性の困窮」に着目した生活困難の把握

脱路上後の生活をマネジメントするのは基本的に本人自身とされているが、実際に家計のやりくりや求職活動などを一人で行うことは難しく、こうした時に誰かに頼める人間関係があれば回避できた危機も多くあると思われる。また、例えば仕事を始めたときには職場の人間関係が構築されるが、退職と同時に(往々にして唯一の)人間関係も失ってしまう。こうした実態を実証的に示すことで彼らの生活困難の構造を明らかにする。

### (2) 非対称な関係性を乗り越える支援(の関係性)の検討

これまでの社会福祉実践の方法論では要支援者との継続したかかわりは前提とされていなかったと思われる。そのため例えば「対等な関係」を目指すと言いつつも、「巻き込まれること」などは支援者として避けるべきこととされており、支援者と被支援者との間には一定の距離(非対称性)があったと言わざるを得ない。そこで本研究では個別で継続的な支援が両者の非対称性を解消する可能性があるのかを検討する。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、以下の調査を行なった。当初は(1)のみを経年で実施する予定だったが、(2)(3)の調査を実施する必要が生じたことから追加することとなった。

### (1) 参与観察

路上生活から居宅生活に移行した人を対象に、支援者として定期的なかかわりを継続させつつ、生活の状況等を把握するというパネル調査的な手法をとった。この研究手法は、対象者との距離がかなり近くなるため、客観的な分析が難しくなる可能性があるという懸念があったが、新たな支援モデルの構築には、支援者の主観的な捉え方も重要な要素になると考え採用した。ただし後述するように、具体的な実施に際しては、いくつかの課題が生じた。

### (2) 生活史調査

「関係性の困窮」という視点を念頭に置いた場合、他者との関係の取り結びにはその人のコミュニケーション能力が大きな影響を持つ。(1)の参与観察を通して実感したの

は彼らの言動が周囲からなかなか理解されにくいものであることだった。その背景を探るため、彼らの育ちが何らかの影響を及ぼしているのかもしれないと考え、子ども時代の過ごし方に焦点を当てたインタビュー調査を実施した。対象は路上生活を送っている方及び生活困窮者のシェルター入居者 10 名である。調査は 2016 年 10 月から 12 月にかけて行われた。

### (3) 支援団体調査

この調査は支援者側の主観的な捉え方を分析に加えようとした(1)の調査を補足するとともにホームレス支援をめぐる動向を把握する必要が生じたため実施した。具体的には、生活困窮者自立支援法の施行(2015年)により、支援者と被支援者がどのような関係に置かれているか、支援をしていく上での課題はどのようなものかを明らかにすることで、個別的で継続的な支援を構想していくための材料を得たいと考えた。そのため、同法に位置づけられている一時生活支援事業の委託を受けた支援団体 A の所管する 4 つのシェルター施設職員に対してインタビュー及びアンケート調査を実施した。

## 4. 研究成果

上記調査の結果はまだ分析中であるが、現時点における知見は以下のとおりである。

### (1) 参与観察について

この調査を実施する上でまず課題となったのは調査対象となる協力者の確保であった。筆者がすでに関係を構築し調査協力に応じてくれた 2 名の方と、支援団体を通じて紹介をしていただいた 4 名の方に調査を行なったが、途中で連絡が取れなくなったり、何度かの関わりを経た後に中断の申し出があったりと、この調査の継続は予想以上に難航した。結果的に研究期間(2013年~2016年)を通じて関係を保つことができたのは(途中で服役により中断した時期はあったが)1名のみであった。このことは研究計画の見通しの甘さとして反省しなければならないことであるが、他方で個別的で継続的な支援を行っていくこと自体がいかに困難であるかを示している。

ただし、短い期間ではあっても脱路上後の生活困難を把握するには示唆的な内容を含むデータを得ることができた。居宅後の生活における人間関係の状況に焦点を当てると、人間関係の希薄な孤立した生活が浮かび上がる一方で、例えば通院先や娯楽施設等で知り合った友人とのトラブルも見られた。また、一見良好に見える関係性も確認できたが、それが継続した支援の妨げや居宅生活の維持を困難にさせる要因になっている様子が見られた。不安定な人間関係が不安定な生活を引き起こすということは想像できることではあるが、今後これらの構造を詳細に分析す

る必要がある。

### (2) 生活史調査について

調査では就学前及び小中学校時代の家族関係およびクラスの担任教員や級友、近隣住民との関係のを中心振り返ってもらったが、自身の就学前から中学までの子ども時代全般を通して家庭の経済状況を「普通であった」「裕福であった」ととらえていた、就学前の時点で自分は親や周囲の大人から可愛がられていたと感じていた、小学校では級友たちとよく遊び、学校が楽しいと感じていた、という語りが 10 ケース中 9 ケースに見られた。また、中学卒業後の進路相談を担任教員にしていたのは 1 ケースで、親や兄弟姉妹が 3 ケース、一人で決めたというのが 6 ケースであったこと、すべてのケースで家族(里親含む)が困ったときの相談相手であると考えていたこと、等が確認できた。

先述したとおり、この調査は周囲からなかなか理解されにくい、ホームレス者の言動の背景を探ることを目的としていたが、調査結果からはその要因らしきものは確認できなかった。ただし、以下の点で留意が必要である。一つはこの調査で語られたことはあくまで本人の主観的な振り返りであって客観的な事実とは異なっていることである。したがって調査対象者が肯定的であれ否定的であれ、自身の子ども時代を全体としてどのようにとらえているか理解したうえで解釈する必要がある。もう一つは(1)の参与観察の調査対象者とこの生活史調査の調査対象者は同一人物ではないということである。インタビューによる生活史調査は、自身のコミュニケーション能力に不安のない場合や自身の過去についてある程度他人に話してもよいと思っている場合に協力していただける可能性が高くなる。今回の調査対象者もそうした層に偏ってしまったのかもしれない。これらのことを留意してさらに詳細な分析を進めていく必要がある。

### (3) 支援団体調査について

4 つのシェルターが現状で行っている具体的な支援の内容と支援する上で課題となっていることを中心に整理したところ、一時生活支援事業に規定されている「衣食住の提供」だけにとどまらない、金銭管理や服薬管理、債務整理のための専門機関への同行など、多様な支援が展開されていた。そして目下の支援の課題としてそれぞれのシェルター職員が共通して挙げていたのが「アフターフォロー問題」というものであった。すなわちそれは、シェルターを利用した後の「つなぎ方」にかかわることであり、より具体的に言えば、シェルター利用期間終了によって「手を離れる」とはいかないケース、つなぎ先との「引き継ぎ期間」が必要となるケースの増加と、それに伴う職員の負担の膨大化であった。シェルターの職員は利用者

との信頼関係が構築されやすい立場にあるため、シェルター利用期間終了後も本人やつなぎ先の関係者等から様々なかたちで「相談」が寄せられ、結果的に対応せざるを得ない状況となっていた。現行では職員の過重な負担を解消するための人員増加は望めず、「アフターフォロー問題」が各団体の事業運営を圧迫するに足る深刻な状況をもたらしていることが明らかとなった。このことは個別的で継続的な支援のあり様を考えていくうえでも非常に示唆に富む課題であるといえる。

#### (4) 今後の展望

研究期間全体を通じた進捗状況は、上述のとおり必ずしも予定通りとはならなかったが、そのことが結果的に次へとつながるきっかけを作ることとなった。(3)の調査で明らかになった課題については、今後より詳細に検討していく必要がある。また、そのためのフィールドを今回の科研費によって得ることができたと思っている。今後もホームレス者に対するより適切な支援のあり様について考えていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

山内太郎「書評 稲葉剛著『貧困の現場から社会を変える』」 貧困研究 vol.18 P103-106 2017 査読なし

山内太郎 松本伊智朗「学界回顧と展望『貧困・公的扶助部門』」 社会福祉学 Vo.57-3 P143-155 2016 査読なし

〔学会発表〕(計 1 件)

山内太郎「健康格差に挑む生活の支援 ホームレス支援の事例からみえたこと」北海道医療大学看護福祉学部学会第12回学術大会(2015年9月23日 北海道医療大学サテライトキャンパス・ACU 北海道・札幌市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

特になし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

山内 太郎 (YAMAUCHI Taro)

札幌国際大学短期大学部・幼児教育保育学

科・講師

研究者番号：90369223

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし